

昔むかし、あるところに、おじいさんがいて、息子が三人ありました。上のふたりは賢かったのですが、末っ子は、ほかのエメーリヤと呼ばれていました。兄さんたちが仕事をしていても、エメーリヤときたら、一日じゅうペーチカの上に寝そべって、何が起ころうと知らん顔でした。

あるとき、兄さんたちが市場に出かけていたとき、兄さんのお嫁さんたちがいいました。

「エメーリヤ、水をくんできておくれ」

エメーリヤは、ペーチカの上から答えました。

「めんどうだなあ」

お嫁さんたちは、

「行つて来るんだよ。さもないと、兄さんたちが帰つて来ても、おまえには、おみやげは無しだよ」といいました。

「じゃあ、行くよ」

エメーリヤは、ペーチカから下りてくつをはき、上着を着ると、おけとおのを持って川へ出かけて行きました。

川に着くと、氷に穴を開け、おけを下ろして水をくみました。

氷の穴をのぞきこむと、下にかますがいるのが見えました。エメーリヤは、すかさずさつとかますを手づかみにしました。

「こいつは、スープにしたらうまいだろうな」

すると、いきなり、かますが話しかけてきました。

「エメーリヤ。わたしを水の中に放しておくれ。そうすりやおまえの役に立ってやるからさ」

エメーリヤは、笑って、

「おまえが何の役に立つっていうんだ。いいや、連れて帰って、兄さんの嫁さんたちにスープにしてもらうよ」といいました。かますは、一生懸命たのみました。

「エメーリヤ、エメーリヤ。わたしを水の中に放しておくれよ。そうすりやおまえの望みは何でもかなえてやるからさ」

「ほんとうか。おれをだましているんじゃないってことを見せてごらんよ」

かますは、

「エメーリヤ、エメーリヤ。いつてごらん。おまえの望みは何だい」とききました。

「そうだなあ。おれの望みは、桶がひとりでに家まで歩いて行ってくれることさ。水がぼちやぼちやこぼれたりしないだね」

「では、こう唱えるんだ。

かますのいいつけ

わたしの望み

桶よ、自分で家に歩いて行け」

エメーリヤは、唱えました。

「かますのいいつけ

わたしの望み

桶よ、自分で家に歩いて行け」

いうがはやいか、桶はひとりでに家に向かって歩きだしました。エメーリヤは、かますを穴に放してやって、桶の後ろについて帰りました。

桶が村の道を歩いて行くと、村人たちはびっくりしました。エメーリヤは、くすくす笑いました。家に入ると、桶はひとりでに壁ぎわにおさまり、エメーリヤは、ペーチカの上によじ登りました。

しばらくすると、お嫁さんたちがいいました。

「エメーリヤ、たきぎを割っておくれ」

「めんどうだなあ」

「たきぎを割るんだよ。さもないと、兄さんたちが帰って来ても、おまえには、おみやげは無しだよ」

「じゃあ、やるよ」

エメーリヤは、お嫁さんたちが出て行くと、ペーチカの上に寝ころんだまま、そっと唱えました。

「かますのいいつけ

わたしの望み

おのよ、行つてたきぎを割れ

たきぎは自分でペーチカの中に入るんだ」

いうがはやいか、おのは飛び出して行つて、庭でたきぎを割り始めました。たきぎは、自分で歩いて家に入り、ペーチカの中におさまりました。

しばらくすると、またお嫁さんたちがいいました。

「エメーリヤ、たきぎがなくなつたから、森へ拾いに行つておくれ」

「またか。めんどうだなあ」

「おみやげは無しだよ」

エメーリヤは、しかたなく、ペーチカから下りてくつをはき、上着を着ました。そして、縄とおのを持つて庭に出て、そりに乗りました。

「姉さんたち、門を開けてくれ」

お嫁さんたちは、

「ばかだねえ。そりに馬をつけるのを忘れているよ」といいました。

「おれには、馬なんていらないうさ」

門が開くと、エメーリヤは、そっと唱えました。

「かますのいいつけ

わたしの望み

「そりよ、森へ行け」

「うがはやいか、そりはひとりでに門の外へ走りだしました。その速いこと。馬に乗ったって追いつけないほどでした。」

「そりは、町の中を走っていきました。たくさんの人をふみつけ、押しつぶして突っ走って行きました。」

「やつを押さえろ」

「やつをつかまえろ」

「みんなが大声でさげびました。エメーリヤは、その上で、知らん顔をしていました。」

「森に着くと、エメーリヤは、唱えました。」

「かますのいいつけ

わたしの望み

「おのよ、たきぎをたんと伐れ。」

「たきぎは自分でそりに積み上がり、束になれ」

「おのはたきぎを伐りはじめ、たきぎはひとりでにそりに積み上がって、縄で束ねられていきました。」

「そりがいっぱいになると、エメーリヤは、おのに、自分用のこん棒を伐り出させました。それから、そりに乗って、唱えました。」

「かますのいいつけ

わたしの望み

「そりよ、家に帰るんだ」

「そりは、家をめざして、飛ぶように走りだしました。町にさしかかると、たくさんの人が、エメーリヤを待ちかまえていました。そして、エメーリヤをそりから引きずり下ろして、ぶったたき始めました。」

「エメーリヤは、まずいことになったと思って、そつと唱えました。」

「かますのいいつけ

わたしの望み

「こん棒よ、やつらをぶんなぐれ」

「こん棒が、飛びだしてきてなぐり始めました。みんなはとんで逃げ、エメーリヤは、家に帰り、ペーチカの上によじ登りました。」

「皇帝が、エメーリヤのいたずらをうわさに聞きました。皇帝は、家来に、エメーリヤを宮殿に連れて来るようにといいつけました。家来は、村にやって来て、エメーリヤの家を見つけました。そして、

「おまえか、ばかのエメーリヤというのは」とききました。エメーリヤは、ペーチカの上から、

「何の用だい」といいました。

「早く服を着ろ。おまえを皇帝のもとに連れていく」

「めんどうだなあ」

家来は腹を立てて、エメーリヤのほつぺたをなぐりつけました。エメーリヤは、そつと唱えました。

「かますのいいつけ

わたしの望み

こん棒よ、あいつを打ちのめしてしまえ」

こん棒が飛び出してきて家来を打ちはじめました。家来は、あわてて逃げだしました。

皇帝は、エメーリヤが、家来の手を負えないことを知って、おどろきました。そこで、こんどは、位の高い大臣を呼んでいいました。

「宮殿に、ほかのエメーリヤを連れてまいれ。さもないと、首を切り落としてしまうぞ」

大臣は、ほしぶどうと、ほしすももと、糖蜜菓子をたくさん買って、エメーリヤのうちにきました。そして、お嫁さんたちに、

「ほかのエメーリヤは、何が好きかね」とたずねました。お嫁さんたちは、

「うちのエメーリヤは、やさしくしてもらって、赤いカフタンをもらうのが好きなんですよ。そうすりゃ、何でもやりますよ」といいました。

大臣は、エメーリヤに、ほしぶどうと、ほしすももと糖蜜菓子をやって、やさしくいいました。

「エメーリヤ、エメーリヤ。どうして、おまえは、ペーチカの上で寝ところがつていんだね」

「暖かいからだよ」

「エメーリヤ、エメーリヤ。皇帝の宮殿に行こう。うんどごちそうするよ」

「めんどうだなあ」

「エメーリヤ、エメーリヤ。皇帝はおまえに、赤いカフタンを贈ってくださいるよ」

エメーリヤは、一生懸命考えました。

「そうだな。あんた、先に行つてくれ。おれはあとから行くよ」

大臣が行つてしまうと、エメーリヤは、寝ころんだまま唱えました。

「かますのいいつけ

わたしの望み

ペーチカよ、皇帝の宮殿に出かけるんだ」

うがはやいか、家の壁がばりばりと音をたてて割れはじめ、屋根がぐらぐらと揺れだし、ペーチカが壁から外れて、家の外へ飛び出しました。

ペーチカは、町の中を通り、まっすぐ宮殿に歩いて行きました。皇帝が、窓からそれを見ていいました。

「ふしぎなものがやって来る」

大臣がいました。

「あれは、ほかのエメーリヤが、ペーチカに乗って、やって来るところです」

皇帝は、宮殿の表階段に出て来ていいました。

「エメーリヤ。おまえはどうしてたくさんの人を押しつぶしたのだ」

エメーリヤは、寝ころんだまま、

「でも、なんだってあの人たちは、おれのそりの下になんか入りこんだんでしようねえ」と答えました。

その様子を、お姫さまが窓からながめていました。お姫さまは、すばらしく美しい人でした。エメーリヤは、お姫さまに気づくと、そつと唱えました。

「かますのいいつけ

わたしの望み

お姫さまがおれを好きになるように

ペーチカよ、家に帰れ」

ペーチカは、くると向きを変えて家に向かって歩きだしました。そして、家に入って元の場所におさまりました。

いっぽう、宮殿では、お姫さまが、エメーリヤを恋しがって、泣き続けていました。皇帝は、なげき悲しんで、大臣にいいつけました。

「ほかのエメーリヤを連れてまいれ。さもないと、首を切り落としてしまうぞ」

大臣は、ぶどう酒とザクースカを買って、エメーリヤのうちに行きました。エメーリヤは、ペーチカの上で、食べたり飲んだりしているうちに、お酒に酔って、ぐっすり眠りこんでしまいました。大臣は、エメーリヤを馬車に乗せて宮殿に連れて行きました。

皇帝は家来に命じて、大きなたるの中にエメーリヤとお姫さまを押し込んで封をし、海に投げ捨ててしまいました。

やがて、エメーリヤは、目を覚ましました。狭くてまっくらです。

「ここはいったいどこなんだ」

「エメーリヤ、わたしたち、たるに押し込められて、青い海に投げ捨てられてしまったのよ」

「あんたはだれだい」

「わたしは、マリーヤ姫よ」

エメーリヤは、唱えました。

「かますのいいつけ

わたしの望み

大風よ、たるを岸辺の黄色い砂の上まで転がして行け」

大風が吹き始めました。海は波立ち、たるを岸辺の黄色い砂の上に投げだしました。

エメーリヤとマリーヤ姫はたるから出ました。

「エメーリヤ、小さな小屋を建ててちょうだい」

マリーヤ姫がいうと、エメーリヤはいいました。

「めんどうだなあ」

「じゃあ、わたしたち、これからどこで暮らすの」

そこで、エメーリヤは唱えました。

「かますのいいつけ

わたしの望み

建て、黄金の屋根を持つ石の宮殿よ」

いうがはやいか、黄金の屋根を持つ宮殿が現れました。まわりには、緑の庭園があつて、花が咲き、鳥が鳴いています。エメーリヤとマリーヤ姫は連れ立って宮殿に入っていました。

「でも、エメーリヤ、あなたはとつてもみすばらしいわ」

エメーリヤは、ちよつと考えてから唱えました。

「かますのいいつけ

わたしの望み

絵に描いたような美しい若者になれ」

いうがはやいか、エメーリヤは、どんなおとぎ話にも語ることができず、どんな絵にも描くことができないようなすばらしい若者になりました。エメーリヤとマリーヤ姫は、楽しく幸せに暮らしはじめました。

あるとき、皇帝が狩りをしていて、黄金の宮殿を見つけました。前には何もなかった場所に宮殿が立っているのので、腹を立てました。

「わしの許しも無しに宮殿を建てるとは、いったい何者だ」

皇帝は、使いの者たちをさし向けました。

エメーリヤは、使いの者たちにいました。

「皇帝に、お客として来るようにいってください。わたしが自分でお話ししましょう」

皇帝がやって来ると、エメーリヤは、すばらしいお酒やごちそうでもてなしました。

皇帝はすっかり感心していました。

「いったい、あなたは、だれなのです」

エメーリヤは、いいました。

「ほかのエメーリヤを覚えていますか。あなたが、お姫さまといつしよにたるに押しこんで海に捨てた若者を。わたしは、あのエメーリヤです。今はここでお姫さまとともに、楽しく暮らしています」

皇帝はたいそうおどろいて、

「ああ、どうか許してほしい。わたしのあとつぎになって、国を治めてくれ」といいました。

こうして、エメーリヤとマリーヤ姫の結婚式が盛大に行われ、エメーリヤは、国を治めることになりました。

これで、話はおしまい。よくぞ聞いてくださいました。

村上郁再話